

〔翻 訳〕

ジョリー・グラハム詩集全訳 (2)

〔訳〕古 口 博 之

1. *Hybrids of Plants and of Ghosts* (1980)
part I, II …… (以上前号)
part III, IV …… (以上本号)
2. *Erosion* (1983)
3. *The End of Beauty* (1987)
4. *Region of Unlikeness* (1991)
5. *Materialism* (1993)
6. *The Errancy* (1997)
7. *Swarm* (2000)
8. *Never* (2002)
9. *Overload* (2005)
10. *Sea Change* (2008)

1. 『植物と靈魂の混合』 (*Hybrids of Plants and of Ghosts*)

III

枠 組 み

何かを除かれ、何かがあとに残るのだ。例えば、

四歳くらいのこのわたしの写真のように、目は
どこかを見つめ、なにか途方も無く、
突然に、
心を奪われ手を空中に上げている。

いままで見たことも無いようなことが フレーム
の左側で起こったのだ、
そして すでに知っているあらゆる事柄は
そのためにもっとくすんでしまっている。
フレームの向こうでは

真夏のアジサイが、咲き続けているが、それ以上
には進み出ることはなく、
この世紀は、遅くなり振り向き、
引き返す；向こうでは
すべての結び目が結ばれて話ができあがり、そし
て そこに
昆虫たちは集まり 大きな機械の立派な
部分となろうとし；向こうでは
風が、とてもやさしく、よりかかり、
羊は

すでに数えられ、
世界は大きすぎて合わなくなっている。
内部では、それは単なる出来事だったのだろう、
過去は破壊的なものとして残るが、今ほど破壊的
ではなく、

知りすぎることで破壊的になるのだ。

マーク・ロスコに

わたしの窓枠の中の
煉瓦のパーベキューの炉に
いま停まりにやってきた
このペルシア風の紅の鳥を
見させようとするものは
ペルシア風の紅の恒常性とでも言おうか。

幻滅や間違った視覚で
捻じ曲げられたような

野原の赤と、鳥を密かに探す
冬の裏庭。彼には
自分を少しぶざまにする
好奇心があり、

まるで生来のものを
ただ学ぶかのような、でも
忍耐はまるでなく、
一つの動きに一度
あたかも、これは心地よいのか、と言うかのよう
な
まさにあのポーズを彼はとるのだ。

また見たとき 彼はいなくなっていた。
彼が飛んでいるのを
想像するのは簡単だ：紅く伸びた炎、
わたしはこうも言うだろう、すなわち、帽子から
ちぎれ
一度あがり

小枝につかまるリボン、
もしくは、飛んでいる口紅を塗った口
しかし それから どのくらい遠く
わたし達は来たのか。
彼は一万年前に
太陽の端からこぼれた
日光の瞬間のなかへ
今飛ぶことだってできるのだ、
まったく新しい
日光と混ざり合って。
違いを理解するための
方法はない。わずかな紅は

いつもわたし達の視野から
まさに滑り落ちてきたのだ、まるで一匹のカージ
ナルが
いつまでもそうではないが、
促され消えるように
とてもゆっくりと ペルシア風の紅から赤紫色
そして白へと滑り落ちるのだ。

雁

今日 洗濯物を干すとき また彼らが見える、
優雅で先を急ぐ暗号が、
目標とともに細くなってゆく。
何日も 彼らは渡っているのだ。わたし達はこう
いう雁の下に

まるで時間の流れか、あるいは最も完璧な方位の
下に生きているのだ。
時々 わたしは雁との関連性を恐れる。
すぐ近く、
洗濯紐の間に、

蜘蛛たちは 雁の迷うことのない道を真似し、
無益にも 終わりのない真似をしている：
物は繋がったままでいることはなく、
修繕されることはない、

そして 世界は歴史のかわりに、場所のかわりに
織り方で厚みを増すのだ。
しかし 蜘蛛のわずかな恐怖は
留め金から紐へ、紐から^{ひさし}庇へ、そして ハケ
ア〔訳〕の藪へと

伸び結ばれている、
まるで、いつでも、物がさらにばらばらになり
どんなもの
意味を回復するのを手助けできないかのようだ。
そして もし蜘蛛が思い思いに、

可視の世界に金網を張ったなら、
わたし達は内か外に入るのだろうか。わたしは内
に入るために戻る。
肉体は心に何かを見失った
という感覚を伝えているが、それは根源的な貧困
であり、まるで

一つの世界を通り、いつでも他の世界に行けると
いう
感覚なしに

落ちてゆくようなものだ。かわりに 現実が
あなたを通過し、
あなたの体が一つの到着点ということは
間違いだと知っているが覆せない。
そして 雁は永遠に入り
蜘蛛は背を向けるという このどことも知れぬ間
隙に、

この驚くべき遅延は、毎日、起きるのだ。

〔訳注〕

1) 植物の名。英語名は pincushion。

新しい木々

縫い目がなく、眼のない、これらの細枝を
二度とどうにもすることができないと長い間考え
た。
かなりたくさんの出口があり

そのどれからでも栄華は回復できるということを
誰が知っていたらうか。
あの眠りの中では いかにも理性の各章は
鮮やかに散らばったとても多く蝶のように、もし
くは

繊細な調子の流れに神秘的に閉じ込められた炎の
ように
完成されたかのように見えたに違いない。
それらを見て 今や、どの葉も

他のものたちを呼び入れるが、そのような二つの
地図が
重なり合うことなど想像もできないことだ。しか
し、
わたし達が信じるものは

そこで最も厳しい追放を受けた後に 肉体を去る
ものなのだ——想像した木よりも
その定義の核心よりも大きく、もっとはるかに満
ちているものだ。

〔翻訳〕ジョリー・グラハム詩集全訳(2)(古口)

心をよぎり それを掠めていったすべてのものが
家とまさに報酬を見つけるのは 木のなかだ、
そして その中で 現在は壊れ続け 岸にも跳ね
返されることはない、
というのも 岸も壊れるからである。そして
それぞれ

堅固な起源は 先端のところまで危うい目的地に迫
り着き、
目が眩み 達成されたものが、道具なのか
原因なのか

確かめられずにいる。そのようなものから わた
し達は出現するのだ、
わたし達は 厳格に後のところに前と描くあの明
確な線に対する暴力なのであり
そこから わたし達は何度も何度も壊れ、考えら
れる限りに

分岐し、一つずつ自分の影像は
ますますこれらの葉と似てきて、
目は集中を忘れず 蜃気楼の波のように揺れてい
るのだ。

わたしが貴方を裏切る理由

なぜなら こうやって世界は進むからだ：白い方
便のうその下を、雪の下を、
どの雪片も単一の
郷愁のかけらだ。知らないうちに
言ったことはすべて
真実となる。雪片は

欠陥の中へ、繊毛のような^{ひび}輝に、枝が折れた
切り株におさまる——ただ途切れることのない線
が、間断なく、
積み重なるのだ。なんと容易に わたし達の跡は
満たされることか。なんと容易に
わたし達は 筋もない

出来事を知りつつ
元にもどされてしまうのか：注意と光と肌の匂い
が

秘密を縫う、一つの幻。何が起ころのだろう。

わたしが

裏切りながらすることは

小者として演じることで、自分の意志で保護領で
ある肉体を

奪い返すことだ また 起こった事柄の

その様式の

法規を変えることだ。

雪は降る

明日がないかのように、そして 世界は新しい服
を着て

若くなりつつある。このような完全無欠に対し

刷毛や

本当の剣で、

やさしくも

白い嘘を 誰が好んでつくのだろう。というの
も この新しい滑らかな肌は

真実のものではないのか、わたし達は同じように
良きものではなかったのか。

どの無分別も

不誠実の抱擁も、

あなたに触れる羽根となるのだ。

鏡

ある人達にとって 自分達がここにいるというこ
とを 知る唯一の方法は、

どうしても信じられないだろうが この上なく時
間的であるところを

行ったり来たりすることだ；

はかなく、悲劇的だが。鏡は

これ以上ないそっくりな顔で眺め返す 自分と
いうものを

よく見てみたいという気を起こさせる。

近寄れば近寄るほど
信じられなくなるのだ――

等身大とは その主体を破壊する危険な民主主義
だ。

類似なものや、小型模型は、

松の世界と同じように、自由に対する冒瀆^{ぼうとく}なの
だ：

この肢は不可能なくらい曲げられ、その背丈は不
自然にされ、

作られるのだ。それとも、

ヨレハマツ^[訳]を見ればいい：開拓地では

それらの地図は読めなくなっていて、虚栄と真実
の愛とで

傍らに追いやられ、

ゆるやかで まだかみ合わない考えのように 折
り重なっている――しかし 我慢強く

厚く成長し 自らを

埋めてしまうほどだ。

その一方 森の中では、

必要性という謙虚な化学現象が すべてのもの
が まったく同じ歴史に

なるよう強いるのだ、

そこでは 現在時制のみが生き残り、

低い枝はすべて妥協させられ落とされる――まる
で そのような群れのなかでは

重複と看過が 自由であるように…。

あまりにもたくさんの矢が

揺れず、変わらない、

うり二つの心臓を狙うのなら、誰もが英雄とな
り、

ある心というものができあがる。なんという勤勉
さか。

功利的なものから わたし達は何になるのか。

あの鋭い、空想的な愛なしで わたし達はどうな
るのか――

嘲ようとしてのけぞり ほとんど同じように見え

る わたし自身の木から枝を出すのか。

〔訳注〕

1) 植物の名。英語名は lodgepole。

模 倣

他の女を、
何とわたしは羨むことか、
この混乱に対する
一種のカナダのように。
常緑樹は
青く、
隠蔽というより
防御であるような——時間を

持て余している女。ここでは
木は前触れもなく
助けもなく
黄色に変わる。カナダよ、
あなたは
そちら側にいて、
自分のものを待っているのだ——サフラン、
黄水仙、茜色

と琥珀色。斜めの
針を持つ
青い常緑樹は
いつまでも待つことができるのだ；
それらは自分たちの道具の
小さな特定の顔を
失くしたのだ。カナダでは
目は背景と
前景を見失う。八月の終わり、
刈った芝生の上、
ある観念を待っているような
小さな建築材料の、
イナゴマメの長くて重い房のこと 覚えているか
い。
島の間に、

水の鳥があり、木がある。

断絶があれば

また それらは作られる。森が

燃える時、心は

言いたくなるのだ

わたしがそれをしたのだ、わたしが

それをしたにちがいないのだ。水の中では、

石黄〔訳1〕、パリスイエロー〔訳2〕、

金色がある。ああ

あなたは持てるのに。

〔訳注〕

- 1) 黄色の鉱物で染用や皮なめし用とする。
- 2) 黄色の顔料。

自画像

新しい雪が降った後 わたしは屋根裏部屋に行き
外を見るだろう。
わたしが見るものはひとそろいの跡となる——最
初は——
それに疵をつけない
ひとつの視野の描写。
何度も何度も
わたしは それを横切っていく

動じることのない土地
だが 見るだけで 自分のものになるのだ。
普通の目の高さで世界を見れば
わたし達の生活から 消えにくいもの、
強調のように 重大なもの
もしくは いまや

氷の文様に縮まってしまった
青い 深溝の川の流れなどがある。ここから見れば
ひとつずつを 自分達のほうに 留めておくこと
は
ごく些細なことのように思える、
それに 全てのものは
空に辿り着こうと

しているのだ。わたしはあなたのために変わりたい、
しかし 同じ関係を保ちつつなのだ。
子供のとき、音楽は
針が刻む跡だと思っていた、
毎回、新しく
まだ 夜で
誰もまだ雪が降ったことを知らない

闇へと入る跡。
そのような孤独な仕事なのだ、
まさに自らを教化するという
この開拓は。
しかし なんと わたしはそれを愛したことか、
プレイヤーのアームを戻し、
何度も何度も、新しくかけ直し、
回路は決して閉まらず
始まりは
途中のあらゆる個別な音のため
決して終わらないということを知りつつ。

ピアノを弾く少女

耳に聞こえる、それは
わたし達から遠ざかって行くように いつも思え
るけれど
同じ速度で それ自体から遠ざかって行く 夜の
列車とともに始まるのだ。
わたし達の家は ほとんど

近所の続きにあるが、かなり薄くなった曲がった
波状のフェンスが
お互いを隔てている。
たぶん ピアノの練習をするのは娘だろう、
列車のように ゆっくり 大きく、ゆっくり き
びしく

まるで コオロギがわたし達の間にはイバラを編
み、どんどん目的を忘れるかのように。
こういう三つの音が続き、
わたしは それらのそばに

なんだか 恐ろしいほど じっとしているのだ。
すべては

新しい幼年期へと変わり、記憶の繊維だけを成長
させ、
最初は コオロギと鍵盤や、
コオロギと列車というように かたく繋がってい
るが、
しだいに ゆるくなり

いつもは 月光に照らされた
窓枠や 軒や 玄関の白い柱の
丈夫な骨に寄り掛かかると。琥珀織のように、
未習得だがその歌は、彼女の心というより
手に住み着こうとしていて、それ以外にはありえ
ないと
思えるほどだ。わたしの隣であなたが寝ているの
は 現実であり、
すべてが推測へと ほどけて行く時 わたしが戻
れる幻なのだ。
しずかに、空気は

とても大切な あなたの息に編まれ、
あなたの体を通った空気は 退いて行き、新しい
空気がやってくる。わかるでしょう、
変質なのです、すなわち わたし達の愛は、
目には見えないが ある模様を描く。しなやかな
アジサイの

根元の土に入れた ペニー硬貨のように、
白い花を青くするペニー硬貨のように、
また 彼女を越え わたしが仕上げる歌で、
もう一人の自分のような 完全に覚えた歌のよう
に、
そして 心臓のそばに滑り落ちていった一ペ
ニー、一人の隣人のように。

鏡のわたしの顔が繊細な野望を語る

ええ それは個人的な事柄で、これが花咲くの

を わたしはいつも眺める；いや
それは わたしの肖像ではない。むしろ

それは 与えられた願望、もしくはもっと その
銀の部屋で

それを 望んだ人として眺めるのだ

そこでは部屋の出口が閉ざされ 願望は たどっ
てきた跡、わたしの跡を

戻らなければならないのだ。

だから、今朝はまた

もっと集約し束ねられたものを 探すのだ；何
か 心を傾けられる、
魅惑的なものを。それは

その主体を本当に真似しようとしているのだ、
わたしは その試みに注意をしなければならな
い。というのも

ともかく、誰がそれを求めているのか、
苔が覆われた岩か、動機で水ぶくれのような 自
我の宿る顔なのか。

とうとう、空想的な筋書きと、仮の英雄の纏わり
ついた苔は
乾き 吹き飛ばされてゆく、

しかし それが生えていた——岩とか骨とか——
のいずれにも、いつまでも、
その繊細な聖戦の跡が残り、

それ自体願いの、全体の観念は 最も小さい
暗号化されたメッセージにいたるまで、

そして、今朝のこの鏡にいたるまで 残る、
そこでは 折々の外皮を成す特徴が

浮き彫りのように 押し寄せ そして 消える
この特殊な運動の この勝利の

唯一で真実の説明なのだ。

静かな生活

窓枠の向こう、二つの越冬の楓の木は繁く重なり
合い

三つ目の、木を編み出すほどになり

すべての境界線は、

重なり合うことで より不透明となり、

分かちがたく

体のように、

わたし達を支える。

窓枠の向こう、天候はいまだ

あたかも 静止のなか

実在の予兆という概念で

世界を規定しているようだ。

というのも 窓ガラスのところでは

わたし達はヒーローとなり

家を出かけ、あの信頼できる織物の、可視の世界

へと旅立つのだ、

また ヒロインとなり

家に留まるのだ。

ときどき リスが

足場のように細い二つの木の間を 行ったり来た
りする——

小さな跳躍は縫い取りのようで

分離されたものは

しっかりと修繕されるのだ。

その影の木、その総体は、

わたしには家のようにあり、わたし達が征服さ

れ 征服してきた場所であり、

一方が他方へと、

妨害もなく、

縮小もなく

できうる限り 手を伸ばすものなのだ——より暗

い木で、翼についた体のように、

この世界を覆う

模様となるのだ

そこに留まったり
外界へ行こうとすれば
なんと精神が静止しているかを知ることになるの
だ。

IV

いかに朝顔が薄闇に咲くか

それのみとなっても 心は続く、タマリンド〔訳1〕
が

夜毎 葉を閉じ オジギソウが、
永遠の暗闇の中でも、
太陽とともに開き 閉じるように。

こんな遅滞に それは動かされているのだ：
ブタナ〔訳2〕は六時に咲き、 マリーゴールドとユ
リは

七時に、八時になるとトケイソウが咲く。
その光は 生き物の魂を待ち、その鳥たちは

歌で 樹枝が開くのを待つ；
その年の終わりは 昼ごとに 野原の
チコリーが花開くのを待ち、野原は
他の眠らない花壇を想像する。

もし 別な世界があるとしたら、それはこれなの
だ：

実在のものであり、現実のものであり、
マツヨイグサ〔訳3〕の上を飛ぶ蝶なのだ。
含まれる間違いは僅かで、それは直すことができ
る：

空が青いのは
空から出て行く途中の 日光の散乱による。
しかし なんとゆるやかに、なんと自発的にそう
なのかは
誰も言ったことがない。

〔訳注〕

- 1) 植物の名。熱帯産のマメ科高木。
- 2) 植物の名。キク科エゾコウゾリナ属の総称。
- 3) 植物の名。北米産のアカバナ科。

満潮のなかで

四つに分けられ、洗われ、表面をこの美しい黒い
針金で通され

輪に結ばれて、かぼちゃはポーチに吊るされた。
九月中に それらははしぼみ、ひび割れる。それか
ら 乾燥するのだった。
風がそれらをよぎる時

カサッと音をたてた：空ろな音で、ほとんど心地
よいものだった——わたし達が
見ていない時 弧にした手が 自らすこし叩いて
いるようだった。

十一月に わたしはそれらの絵を描いた。
それらはもう変化することは無かったのだ。

わたしはそれらを 陸に封じ込めるように描い
た。深い溪谷。

それらは それらを見放した川を嘲笑った。
わたしは 月の四つの変化として それらを描い
た。四つの小舟が回るように。

杭に縛られた四つが、ときどき 互いにつき合
うように。

四つの帆が
斜め後方から風を受け、速度を増すように——な
んと賢く、

なんと信じられないくらいの忍耐か！ わたし達
はそれらを屋内に運び

台所の大きな釘に吊るした。わたしは またそれ
らを描いたのだ、ライスペーパー〔訳1〕の嵐
に

瀕した四つの船、船乗りにかろうじて避けられ、
おかげで、家を見つけるのに役立つ四つの岩のよ
うに。

同じ少女を想う四人の船乗り達の記憶のように。
それから
それらを調理する。水、塩に浸すと、膨らんでく
るのだ。

季節はずれのものをもつことは なんと良いもの
なのか。夏のカボチャが
冬に取り入れられ、外には
信じられないくらい 雪が降っている。
すべての木々が波の下に埋もれ、静まっている。
世界は

あらゆるところ 損傷や混乱も無く それ自体へ
と流れこむことができるのだ。
わたし達が知らない何かは わたし達がいなくとも
も完全であり 続くのだ。
大洋の反対側には、
四つの黒い帆が合わさり

黒い花崗岩の崖のように 海の端にかぶさり、
この最上の侵食を守っているのだ。ローズマリー。
タイム。タマネギを四等分する。
いま あなたには言えない——あなたはとても喜
んでいるから——しかし
それらを戻そうと あなたはすべきではないと
わたしは思うのだ。

〔訳注〕

- 1) カミヤツデの木の髄から作る薄い上質紙。

連続の針編み

季節の終わりに 世界は穴を掘り、豊かな花は
もう少し長く留まろうとする。
何物も満足しているようには見えないが、
さらに進み続ける真の理由もない：
ここは悪い場所ではないのだ；
わたし達がそれを望んだという

ふりをしてはどうか。
藪は自らの腰と臀部^{でんぶ}とともに生きるようになっ

た。
アジサイは
その青く果てるともない発話に身をまかせてい
る。
季節の終わりに向かい
体を持つことは

悪いことではない。空腹を癒すような単なる
喜びを経験することは
それを知らなかったということにはならないの
だ。

タバコの葉は
長い棚に移される
ことは気にしないのだ——すべての使用とは

使われるものにとっては 驚くものなのだ。
わたし達の生には 繋ぎ止められ 天国を与えて
くれる瞬間がある——

たとえば、昼とか、重力のすべての勝利とか、
熱狂するものなかで最も繊細で、
この季節にこれほど

その運を伸ばしてきた^{くず}葛のつるとか。
それは満足そうに緑に輝いている。
その端は、一種の風の、いらだちで暗くなる。
何物もまた これほど心地よいものはないだろ
う、

命は縫われた針跡のように 掬い取られ、
キスゲの枯れた茎は わたし達にはない静けさを見せる。

緩やかな音響と究極の再出現

この鯨、このヴァレンタインの。あなたのものだ。
パレードのようなあなたの忍耐。君の平穩はどこ
にある

とあなたは言った、というのも わたしには
そのはっきりしない伝言と、
あなたの聴力が暗号となる
不協和音は聞こえない。ああ あなたはいつまで
も

待つつもりなのだ、
その一方 日は速く過ぎ 雑音は、快活な雑音
で、
たいした梯子となっている。
細切れの示唆や、暗示や、緩慢な同化なんて
やめてくれ。
それをまとめて受け入れよう。だが、あなたは

喜んで 待っているのだ、
そして その柔らかな核心のところで、あらゆる
ことに
このような無知があり、わたしは
岩のなかの砂の脈のような、血管のなかの岩のよ
うな、脈を想像するのだ、
だが あなたが旅するこの血管——
巨大な鯨の目に繋がる

絹糸——
は、だんだん細くなり乾いてゆく作用を 始めな
い。しかし
可視の忍耐は
不可視なのだ——
ジャックの豆の木の莖は 事件を待ち、お金は
手を待つ。深く

深く行くのだ。表面から、わたしは
おぼろに心臓の形をして、青いものが底にあり、
定義されることを待ち、根のようなものがあるこ
とを想像する。
さらに深く行くのだ。
いつでもそれは 始まるのだ、開くこの青——
これはあなたのおとりでもなく、試運転でもな
く、

親しい物のなかでここに打ち上げられた
絶対的な物の使者なのだ。
あなたは探す。わたしは待つことを指で数える。
一つずつ わたし達のアリバイとして。
それが わたし達が祝うやり方であり、
愛であり、明日を見つける方法なのだ。
それは どんな時でも起こりうるのだ。

証拠の性質

冬に差し込む日の光は 一日中残り、
ツルウメモドキの凍った蔓は まるで櫛のように
堅く
藪の上にマントを被らせて、
ほんの少し成長しただけでも

壊れてしまうような婚姻のようだ。
バラは通路に閉じ込められ うれしく思ってい
て、
リス達の最後の願いは この静かで
すこぶる意欲的な
首筋に
ネックレスのように残っている——

いまごろ それらはすべて どこかに着いてい
る。屋内では、
わたし達の足跡は単に違うものになるのだ：
わたし達に関わるものは運であり、
誰の順番なのかということなのだ。
時々 あなたは

わたしの握った手をあなたの手でつつむ、
それはすばらしい二重の参加というもので
わたし達の二つの完全なる祈りが
いかに合わないかということを

見せつける。
屋外ではずっと、静寂のもと、
いかに肥沃なものが 肉体をもとめ、
逃れようとしているのかは
知っているけれども、

その世界を わたしはいかに
純粋な概念として捕まえたいことか——だが、わ
たしの経歴からすれば、わたしは、
それに向かっても、また自分自身のみを見つける
のだらう、

そして、いや、それは無くなったので そこにあ

るのだと
理解することだけでは 十分ではないようだ。

こころ

雨の緩やかな序曲は、
一つずつの滴が 別の滴に
分かれていく
ことなく、
仮借なき、シンコペートした
こころを描く。まるで
ハチドリが
自分の羽を
心臓だと思い、ツバメが
地平線を
自らが上げ下げする
線だと信じているかのように。それらが
求めているものは 何なのだろうか。ポプラは、
前進し 退却しながら、
等しく
背丈を失くしているが、しっかりと立ち、
想像上のものに
なろうとして
準備をしている。町は
こころを街路に引き込み、
街路は
何物も誰のものでもない
交差点より
それを駆り立てるのだ。それは
世界の
すべての静的な部分を
通り運ばれるもので、
物における
重力の元金がんきんなのだ。葉は、
十一月の土の
湿った窓に
押し付けられ、
変形するまで 歓迎もされず、
パズルの部品は
端がすこし崩れ
柔らかくなるまで

〔翻訳〕ジョリー・グラハム詩集全訳(2)(古口)

解けることはない。
そのとき どれほど その絵がはつきりするの
か見てごらん、
こころは地中にもぐり
より簡単に ばらばらになり、
そのため より豊かになるのだ。

今や疾風は

今や疾風は、いままでになかったほど、役に立っ
ている。それは
物に挟まった いろんな植物の端を いやいやな
がらも引き離す：空気や、
枝の間の
青空。

そうでもなければ 葉は 時代遅れの、
たぐさんの通貨のように、
絶対的とおぼしき価値に まだ しがみつに残る
のだろう。
すべてのものは 去るのだ。

すべてのものは この風のなか、向きを変え 回
りながら 去ってゆくのだ、
風に飛ばされ、再び生まれてくる種と、
あらゆる葉、茎、走出枝そうしゆつしと ライラックを離れた
極めて小さく開いた蕾のなかに

場所を探しながら。
しかし 雑草は、なんという標本となることか、
ここでは、救済とは
この繁茂した世界から 永遠に放たれることなの
だ——万病草とクワガタソウ、

チョウセンアサガオ と オドリコソウ——いかに
それらは
いつも同じ、一つの、冒険に戻る事か。
わたし達は 実際 それ以上を願うのだと言える
だろうか。
風の逸脱は

一つの壮大な遠出であるが、すべての意見がそれ
に同意するわけではない。
これらの深く種を結んだ雑草のように、いくつか
は、
まさにじっとしたままで
わたし達が 同じことをするように願っている
——風を中心にある現在時制の

その中で わたし達は
すべてのものが去るところへ 行く準備ができて
いるのだ
いつまでも ガマの役に立つ若枝や
小鳥たちが必要とするエゾギクに 突然 気をそ
らされたとしても。

ルルド^{〔訳1〕}：友のためのシラブル

だから これが肉体の弱さであり、衝動は
心の憂愁となるのだ；ここでは
すでに癒された者は
一人ひとり
完全に見えるようになるための
全ての罪の赦しを待っている
希望を持っている人達の

世話をするのだ。そして 清められることは こ
こからそこへ歩くことであり、
この世界を意識して見下ろすことなのだ。だから
どんな幻も見なかった
聖ベルナデットの
彼女の口のところで、
彼らは彼女の空腹を待ち、
いくつも肢体と車輪と

独自の第二の時計を並べている——五月に、
カバノキの木立に絡みつく
葛のような
曲がった蔓の争いのように；
一人ひとり 息をして、
一つずつ 違った希望を持ち、
白熱したチューブ管、油、酸と透明な塩水性の溶

剤の

ように混ざり合っている。何でもここでは
甘いものは苦いのだ。罪を犯すところの目は
それを通し見るもので、
それを通し見られるものだ。
奇跡は
わたし達には関わりなく
それ自体で

できているようである——白血球が狂いだし シ
ラブルが
概念になるようだ。そして これら、以前癒され
た人達は、
病気の人達よりも
さらに急いでいるのだ。不平等という
あの神聖な、あの心変わりな
いつ何なりと起こりうる、
ということを 彼らは知っているのだ。

〔訳注〕

1) フランス南西にある町。1858年4月16日に聖
ベルナデイトが聖母マリアの姿を見たと言われる泉
がある。

死後の世界

死後の世界においては きびしい太陽の光の波の
中に
陰がある。疲労感
一種の喜びなのだ。
わたし達の幾人かに 死後の世界は 少しずつ特
徴を見せる

まるで この命が 骨にしまわれているかのよう
に、骨は進もうとする要求に
簡単に消えてしまう境界線なのだ。
その孤独はたわごとなのだ。
死後の世界は 森の中が突然開けるようなもので
議論における簡潔な移行のようなものだ。そし
て それは教会を必要とし、

わたし達を信徒席にきちんと分ける。
きちんとわたし達は
まったく同じように前を向き、

何も見過ごさないようにしようとする。
死後の世界は
役に立たないパステルカラーの プチポワン刺繍
のようなもので
突然重くなった

外のハコヤナギの陰気な寂しさのほうだけに向い
ている。
このような荒涼とした 歩んだ道のみが残るとい
う地図から
どのように彼らは浮かび上がることができたのだ
ろうか。
この死後の世界では 開花が線的なものを支え、
新しい鳶の鎖の輪が

崩れかかった納屋を支えている。わたし達の家
も 個々の迷路において、
それをもてなす；
草はそれが次第に消え 触れられずにいたがって
いるかを描く。

死後の世界は主帆であり

雷に打たれた松の木が待っていて、
心しだいで 消えまたは見える 想像上の点なの
だ。
死後の世界は電気であり
全的なものとして 交わって、

その過程でなくなるものは 何も無い。
地中に葉しおみたくに——まるで 場所が分からなく
なるとでもいうように——
置かれる墓石のようなものではなく、
ましてや 読むことを続けるわたし達でもない。

真 珠

今や世界は、秋で、木の実を産み

草を食む牧場の動物たちは
飼育された状態から 誘い出されている。
長い間 飼育に慣らされていたので、それらは獐
猛になるが、

一握りのトウモロコシがありさえすれば すぐ近
くへ戻ってくる。
太った蠅のように素早く動き 戻るのに、
どれほど遅れると
いうのだろう

ゆっくり、とうとう、それらはやって来て
屋外に住み、最後の地図のなか
基地と基地をつなげるのだ。救われることは
問題に対し 新しい解決法を見つけ続けることで
あり、

続けさえしていれば 間違ふことは決してない
というような
スキヤットの歌か即興のようなものなのだ。
また タバコの木を植える時期になった。男たち
は満月を待ち
それから

農場へ裸で繰り出す。
彼らがそこに埋めるものは 家庭的なものなの
だ。そのみが
まったく宝石のように 敵に完全に従順な収穫を
実らすことができ
屋内で髪を結われた女たちに 今や切られる厚い
髪は、

十分さのため
十分に切られる。模倣とは
毎日が魔法になる光なのだ——そして こういっ
た母親たちは
髪を再び編みながら 長持ちする溶剤につけ

紐を切り、子供たちが
間に合うか 豚を見つけに丘を駆け上っている
か すこし心配する、
しかし それらを見失っても たいして構わない

のだ
それらを失くさないでいることは

わたし達の完全性を測るものだ、
細くなった影が消え、
月の光は でなければ空虚な空の苦しみから
真珠のような 完成された 魔法を作っているの
だ。

ヴォルテールのための羽根

鳥はアルファベットであり、それは
わたし達の上を飛び、捕まえようとするなら
捕まえられ、
群れであり、
旅の計画である。
いくつかは決して地上には降りない。

そして どの飛行も 空を支える弧であり、
空への貸しである。
そして わたし達が落ちてくる 一つずつの羽根
を拾い、それから
作る小さな言葉は
落ち続け、
素早く動く鎧となっている…。

今朝羽根が舞い、そこで庭は
風に上昇し、言う
ほら地面に着かないほうが
安全であり、
よりよいのだと。
言葉をたくさん持っている人は

雑草の庭であり、
雑草が育つとき、
雪の庭となり、
足跡のネックレスとなる：それはおそらくここに
いたのだ わたしのシマフクロウは。
誰がそれを脅かしたのか。
わたしが、と雀は言い、

わたしは矢が必用でしたと言う。
そして わたしはここに、ひとりで
この変化の多い国に受け入れられるのではなく
受け取るために入る。
体から引き抜かれ また 雪の上にあった
羽根は

インクに浸せば
ひとつ またそれ以上の 言葉を作る：所有する
ところの、太陽。ペンは
ここまでやって来たが、まだ行くしかないと
酔うのだ——野原、
無駄な、痛みを
想像してみよ

そして 彼がいなくなったとき 何も無くなり
そして これが王国への鍵なのだ。

(終)